

思い出出すこと

父と千里山

十八回生 小松 暢子

(目向)

昭和六年、父（日向方齋）は、当時の住友本社に入社し、初めて大阪の地に住むことになりました。

最初に居を構えたのは豊中でしたが、程なくして千里山に転居しました。

当時、関西については、西も東もわからぬ関東出身の新婚夫婦でありましただけに、多少でも不安な気持ちがあったのかも知れません。

母と親戚関係にあった柳父幸子様（六回生）のお父様のお近くに住みたくなったのではないかと思えます。千里山では三回転居しております。

若い頃の父は、比較的身体が弱かったためか、お医者様の近くに住みたかったという事情もありました。

明るく進取の気性に富んでいた父は、千里山のモダンな住宅街が気に入ったようでした。そのころ、父は時折、流行していた「モボの唄」を口ずさんでおりました。生真面目な母は、歌詞の内容を苦々しく思っていたらしく、

「お父さんは、あの様な唄を歌って自惚れてイヤね」と本気で怒っていたのをみて、私は子供心に可笑しくて仕方がありませんでした。

三度目の家では、小さな庭に、父はチューリップ、ヒヤシンス、デージーなどの花々を植えて、明るい小住宅の生活を楽しんでおりました。



父とともに（我が家にて）

父は千里山で唯一のバス（弘済会行き）に乗り、山田のゴルフ場へも通っております。幼かった私も、時折母と共に同行し、クラブハウスのコーヒートの香り



母とともに（クラブハウス前）

に西洋を感じながら、バナアイスクリームやプディングを食べたものでした。得も言われぬハイカラな雰
囲気に包まれ、不思議な心のときめきを覚えてたことを昨日のことに思うようにしております。

多分柳父様のお父様のご紹介ではなかったかと思いますが、ご高名なチェリスト・伊達三郎様のお宅で、ダンスのレッスンを楽しんだようで、晩年自慢げにダンスも出来たのだと話をしてくれました。千里山会誌第五号で、十三回の小川雅子様（旧姓伊達様）が「朝比奈先生と千里山」を寄稿されております。父は朝比奈隆様と旧制東京高校の第一回生として、終生の友人で、公私にわたり大阪フィルハーモニーを応援していただきました。伊達様が当時どのあたりにお住まいでしたのか、長年の疑問でした。

二〇〇五年二月「銀座ライオン」で開催されました「千里山幼稚園OLD CHILDの集い」で、偶々十回生、五十嵐葉子様（旧姓伊達様）のお隣に座るこ

とが出来ました。その折り、五十嵐様のお話から、父がダンスを教えていただいた伊達様のお宅は、私どもの家の目と鼻の先にあつたことが判明しました。半世紀を超える私の疑問が解けたのです。ダンスのお稽古がある日には、少女でいらした五十嵐様も床磨きなどに動員されたことも伺い、大変恐縮致しました。父はワルツやタンゴを教えていただき、熱心にご指導を受けたようです。保守的な母と異なり、「新しもの好き」の父の若き日を彷彿させていただきました。娘の私が想像していたより遙かに本気の「モボ気取り」だったのかと思うと、ほほ笑ましいものがあります。

私が物心ついた後は、父と食卓を囲んだ記憶は少なく、仕事一筋、お国のため、会社のためと邁進し続けた父親の姿が大部分です。

昭和十年代のアルバムに残る、父の千里山に関するコメントは「噴水」「桃」「朝の路」「山田公園の若葉」「松の木山のあした」「丘」など叙情的な言葉が数多く書かれております。

初夏の夕刻、アカシアの甘い香りが漂った、昭和初期の千里山は、若き日の父に夢と希望、家庭のぬくもりをふんだんに与えてくれたのではないかと思っております。